

【授業実践報告】

英語コミュニケーション専攻 上級演習科目Reading Workshop A・Bの実践報告

望 月 正 道

はじめに

2020年度から英語コミュニケーション専攻上級演習科目Reading Workshop A・Bを新たに担当することとなった。本稿は、この科目の学習到達目標、目標を達成するために準備した教材、授業での指導方法、試験結果、アンケート結果を振り返り、考察することにより、授業改善へつなげることを目的とする。まず学習到達目標の設定、教材としてイギリスの*The Independent*の記事の選定、学生の理解を確認するワークシートについて説明する。つぎに、授業の運営方法について述べる。最後に試験結果とアンケート結果から、学習到達目標が達成されたのかどうかについて考察する。

1. 学習到達目標

1つの科目を準備するにあたり、第一に考えなければならないことは、学習到達目標である。この科目を履修することで、学生はどのような能力を身につけることができるのかを明確にしなければならない。Reading Workshopという科目名が示すとおり、英語を読む能力を育成すべきであることは言うまでもない。それでは、英語を読む能力とはどのようなものだろうか。文部科学省は初等中等教育の学習到達目標を学習指導要領という形式で示しているが、高等教育における学習到達目標は、各高等教育機関が独自に定めるものとしている。参考として、高等学校学習指導要領の英語コミュニケーションⅢの「読むこと」の目標をみてみよう。

(2) 読むこと

- ア 日常的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、必要な情報を読み取り、文章の展開や書き手の意図を把握することができるようにする。
- イ 社会的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、支援をほとんど活用しなく

ても、文章の展開に注意しながら必要な情報を読み取り、概要や要点、詳細を目的に応じて捉えることができるようにする。(2018年度版高等学校学習指導要領pp.226-227)

この「読むこと」の目標は、日常的な話題や社会的な話題について書かれた英語の文章を読み、概要や要点、詳細を捉えるだけでなく、書き手の意図を把握することを挙げている。この目標では、読むこととは、英語の文章を読み、その要旨や書き手の意図を把握するという理解のレベルを到達目標としていることがわかる。

それに対して、同じ学習指導要領の「現代の国語」の内容の「思考力、判断力、表現力等」における「読むこと」は、(1) 指導と(2) 言語活動について、つぎのように記載している。

- (1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
 - ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握すること。
 - イ 目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深めること。
- (2) (1) に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。
 - ア 論理的な文章や実用的な文章を読み、その内容や形式について、引用や要約などをしながら論述したり批評したりする活動。
 - イ 異なる形式で書かれた複数の文章や、図表等を伴う文章を読み、理解したことや解釈したことをまとめて発表したり、他の形式の文章に書き換えたりする活動。(2018年度版高等学校学習指導要領p.27)

「現代の国語」では、文章の種類に応じて、要旨を理解できるように指導すること、目的に応じて、書き手の意図を解釈したり、文章について評価したり、自分の考えを深めることができるように指導するとしている。指導方法として、2つの活動を例として挙げている。1つは、文章を読み、その内容を要約しながら論述したり批評したりする活動であり、もう1つは、複数の文章や、図表等を伴う文章を読み、理解したことや解釈したことをまとめて発表したり、他の形式の文章に書き換えたりする活動である。

高等学校学習指導要領は、英語コミュニケーションIIIでは読んで理解するという受容的技能の育成を求めているのに対して、現代の国語では、受容的技能に留まらず、要約する、批評する、理解や解釈をまとめて発表するなどの産出的技能までも「読むこと」の指導に含めている。これは、経済協力開発機構（OECD）が3年ごとに実施している「国際生徒学習到達度調査（Programme for International Student Assessment：PISA）」の読解力の定義によるところが大きい。PISA2018では、読解力はつぎのように定義されている。

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと。
（文部科学省・国立教育政策研究所、2019）

読解力を測定する能力としては、つぎの3つが挙げられている。

- ① 情報を探し出す
 - テキスト中の情報にアクセスし、取り出す
 - 関連するテキストを探索し、選び出す
 - ② 理解する
 - 字句の意味を理解する
 - 統合し、推論を創出する
 - ③ 評価し、熟考する
 - 質と信ぴょう性を評価する
 - 内容と形式について熟考する
 - 矛盾を見つけて対処する
- （文部科学省・国立教育政策研究所、2019）

このようにPISAでは、読解力を測定するために、読んで理解するだけでなく、書かれている内容の質や信ぴょう性を評価したり、矛盾を見つけて対処することを求める読解問題が出題されている。文部科学省・国立教育政策研究所（2019）は、日本人生徒は、テキストから情報を探し出す問題やテキストの質と信ぴょう性を評価する問題の正答率が比較的低かったとするとともに、読解力の自由記述形式の問題で自分の考えを根拠を示して説明することに課題があると結論づけている。文部科学省は、このようなPISAの読解力の結果を参考に、学習指導要領の国語についての記述を改訂していると考えられる。

高等学校学習指導要領とPISAの読解力について考える

と、英語を言葉として使うためには、読んで理解するに留まらず、読んだ内容について要約して伝える、質や信ぴょう性を評価する、解釈する、批評する、のように産出することが求められることがわかる。そのため、Reading Workshop A・Bの学習到達目標として、つぎの5つを設定した。

- （1）イギリス国内の出来事だけでなく、世界で報道されるニュースを読み解く力を育成する。
- （2）ニュースの背景やその後の進展について考える。
- （3）ニュース記事の内容を英語で要約し、口頭で伝えることができる。
- （4）ニュース記事の内容について自分の意見を英語で表現することができる。
- （5）英字新聞で頻繁に使われる語彙表現を習得する。

（1）は英語を専攻する大学生が身につけるべき英語読解力には、英語の新聞を読んで理解できることが含まれると考えるからである。教材として、*The Independent*を使用するが、イギリス国内の記事だけでなく、全世界から学生がだれかに内容を話したくなるような記事を選択した。（2）は文章理解には言語知識だけでなく背景知識も必要になるため、異なる文化や習慣についても理解を深めることを目標とする。（3）は読んで理解した内容を自分の言葉で英語で伝えることを目標とする。産出的技能の育成を図るものである。（4）も記事の内容について自分の意見や感想を英語で伝える産出的技能の育成をめざすものである。（5）は英語の新聞を読みこなすための語彙力の増強を目標とする。

2. 教育方法

2.1 教材

2.1.1 新聞記事

授業で使用した*The Independent*の記事は、学生が読んでおもしろいと思い、他人に内容を伝えたいと考えたものを選んで配布した（資料1・2を参照）。内容としては、社会生活、科学技術、環境問題などで、ちょっと変わったニュースを取り上げた。たとえば、1Aは、犬が車をバックで1時間近く円を描いて運転したことを報道している。2Aは、手術中に電気メスを使用したために身体に塗ったアルコール消毒液に引火して患者が焼死したことの報道である。すべての記事は、必要に応じてA4判で1ページ程度に短縮した。1単位時間の授業で、1Aと1Bのように2つの記事を扱った。

2.1.2 ワークシート

1学期のReading Workshop Aでは、資料3に示すようなワークシートを作成した。ワークシートはA4判1枚で、2つの記事の内容理解問題と1つの記事の英語の要約と意見を書くように作られている。内容理解問題は、英語の質問で、1つの記事に3つずつ6つである。記事の要約は、

2つのうち自分がだれかに伝えたい方を選び、要約と意見を書く。学生は予習で記事を読むこととワークシートの設問に解答することが求められる。学生が辞書を引く必要がないように、cul-de-sacのような難しいと思われる単語に日本語訳をつけた単語集を配布した。

2学期のReading Workshop Bでは、資料4に示すようなワークシートを作成した。内容理解の確認を訳語に相当する英単語を記事から抜き出す形式と日本語訳や日本語による内容理解の形式に変更した。これには、2つ理由がある。1つは単語集に頼って予習してこない学生が見られたため、単語集の配布をやめ、日本語に相当する単語を英文から探し出す形式にした。第2の理由は、英語の質問に答えるためには英文を理解する必要があるが、それができていない学生が多いことが判明したためである。すなわち記事の骨子を捉えるために必要な文を訳させたり、「火事はなぜ起こったのか」のような日本語の質問に答えさせることにより、学生が内容を理解しているかどうかを確認した。

2.2 指導方法

授業は、2020年度は1年を通してZoomによって実施した。1コマの授業は、つぎのような①～⑦の活動から成る。②～⑤は記事Aが終わると、記事Bについて同じ手順を繰り返した。

- ① 復習単語テスト (10分)
- ② グループによるワークシートの答え合わせ (5分)
- ③ 全体でのワークシートの答え合わせと解説 (10分)
- ④ 英語の口頭要約練習 (10分)
- ⑤ 1～2名による英語の口頭要約 (5分)
- ⑥ 1つの記事の要約と意見のライティング (15分)
- ⑦ 質疑 (5分)

①の復習単語テストは、資料5に示すように、10の英文の空欄に入れるべき単語を11の選択肢から選び、書き入れる形式である。テストはGoogleフォームで作成し、Google Classroom上で10分間で実施した。

②は、Zoomのブレイクアウトセッションを利用し、3～4人のグループで答えを5分間で確認させた。③は全体ミーティングで、教師が指名して学生が答えを言う形式である。解説は、学生が正解した部分では簡単に、間違えた部分は詳しくするようにした。

④と⑤は、⑥の要約と意見を書くための活動である。④は、記事の要約に必要なキーワードを6つほど挙げ、それをもとに記事の内容を自分の英語で言う練習である。まずキーワードの発音練習をし、その後、個人で口頭要約の練習をする。つぎに、ブレイクアウトセッションで学生をペアにし、1分間ずつ英語の口頭要約を言い合わせる。⑤は全体ミーティングで、1名、2名を指名して、口頭要約を言わせた。このような手順にする理由は、話すことと書くことの違いに基づく。日本の英語の授業では、スピーキン

グ活動をする場合、まず話す内容を書かせてから、それを参照しながら話させる手順をとる教師が多い。しかし、この方法だと、学生は書いたものを読み上げているだけで、話しているのではない。話すことは基本的に即興で行う言語技能である。それに対して、書くことは時間をかけて、文法的にも語法的にも正しい文章を作成する技能である。したがって、まず読んだ内容を自分の言葉で即興で言う練習をした後、それを時間をかけて的確な要約に洗練して、書かせることが望ましい手順になる。

⑥は、2つの記事から1つを選び、その要約とそれについての意見を書く活動である。意見としているが、2つの記事のうちなぜその記事を選んだのか、それについてどう感じたのかというようなコメントでよいとした。PISAの読解力で求める「テキストの質や信ぴょう性を評価する」「テキストを批評する」能力を育成するには及ばないが、日常生活で行っている言語活動を考えると、読んだ内容を伝え、それにコメントすることが英語でできるようにすることが最優先されるべきだと考える。ワークシートはGoogle Classroomの課題として提示されるので、それに要約とコメントを書き込んで提出する。

提出されたワークシートは、要約とコメントの部分のみ文法的・語法的誤りを訂正した。訂正した要約は、Very good summary and comment. Can you spot what I corrected?のようなコメントを最初につけて、得点とともに返却した。以下は、学生が提出した要約と意見、それに対するフィードバックの例である。

学生の要約と意見

1st article. The SpaceX company plans to send four normal civilians to space by Crew Dragon craft but it is going to be an expensive trip about many tens of million dollars and it is not clear. Of course this experience will became good, but it takes a high-risk So I wonder how many people want to go to space by this plan.

フィードバック

Good summary and comment. Can you spot what I corrected? SpaceX plans to send four normal civilians to space by the Crew Dragon spacecraft but it is going to be an expensive trip that will cost many tens of millions dollars. The price is not decided. Of course this experience will be good, but there will be a high risk in it. So I wonder how many people want to go to space by this plan.

⑦の質疑は、その日扱った記事について質問がある学生がいる場合、Zoomに残って聞けるようにしたものである。1年を通して5～6回質問があった。

2.3 試験

試験は、各学期2回行った。授業で扱ったすべての記事

について、150語程度の要約を作成した。それぞれの要約に5つの空欄を作り、6つの選択肢から選ばせる形式の試験をGoogleフォームで作成し、Google Classroomで実施した(資料6を参照)。

3. 授業アンケート

担当科目については大学が行う授業改善アンケートのほかに、筆者独自のアンケートを作成し、1学期・2学期ともに最後の授業で実施した。1学期は、「あなたの授業への取り組み」(3項目)、「授業の内容」(3項目)、「教師の教え方」(3項目)について、「強くそう思う」から「まったくそう思わない」までの5件法で回答を求めた。また「この授業を受けてよかったこと」と「この授業で改善してほしいこと」について自由に記述させた。2学期は、「あなたの授業への取り組み」は1学期と同じだが、つぎの点を変更した。「授業の内容」を6項目に増やした点、「教師の教え方」に代えて「おもしろかった記事」と「難しかった記事」を複数選択させた点、「読んだ記事について英語で誰かに伝えたことがありますか」と「読んだ記事について日本語で誰かに伝えたことがありますか」を加えた点である。「おもしろかった記事」と「難しかった記事」を複数選択させた点は、来年度以降の記事の選択の参考にするためである。また、「読んだ記事について英語で誰かに伝えたことがありますか」と「読んだ記事について日本語で誰かに伝えたことがありますか」を加えたのは、学習到達目標に読んだ内容を要約し、自分の意見を言うことを挙げているので、それがどれくらい実行されたかを調べるためである。

4. 結果と考察

4.1 試験結果

1学期のReading Workshop Aの履修者は26名で、2学期のReading Workshop Bの履修者は41名であった。それぞれ2回ずつの満点、平均点、標準偏差を表1に示す。

表1 RWA・RWBのテスト満点・平均点・標準偏差

	RWA test 1	RWA test 2	RWB test 1	RWB test 2
満点	40	40	50	50
平均	29.5 73.5%	28.5 71.3%	35.4 70.8%	36 72.0%
標準偏差	4.73	8.57	9.9	7.13

表1から明らかのように、いずれのテストも平均点が満点の70%を越えていて、学生は新聞記事の内容を理解し、そこで使われている語彙表現を理解していることがわかる。

この結果について考察すべきことは、2点ある。まず2020年度は試験もZoomとGoogle Classroom上で行われたことである。1学期の2回の試験は、Zoomのカメラをオン、ミュートを解除した状態で受験させた。これは不正行

為を排除するためである。しかしながら、学生がコンピュータ画面上で何を行っているかはわからない。新聞記事を見ているかもしれないし、辞書を使っているかもしれない。さらにSNSで誰かとやりとりしていたとしてもわからない。したがって、平均が70%だとしても全員が不正行為なしで、その得点を獲得したのかどうかについては疑問が残る。第2に、記事の要約の穴埋めというテスト形式は、受容的理解を測定しているが、産出的理解は測定していないということである。学習到達目標として、新聞記事を読んで理解した内容を英語で伝えることができることや、それについて意見を言うことができることを上げているが、この試験結果は、その目標が到達できたかどうかについての情報は提供していない。これは来年度以降の試験を作成するにあたり、考慮すべきことがらとなる。

4.2 アンケート結果

4.2.1 1学期のアンケート結果

1学期のアンケート結果は、表2のとおりである。履修者は26名だったが、回答数は32である。これは、アンケート作成時に、同じユーザーが1回しか回答できないように設定していなかったためである。回答者の特定ができないために、32名の回答の結果を報告する。

表2 1学期のアンケート結果 (32件の回答)

あなたの授業への取り組み					
	強くそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない
この授業はよく理解できた	5	23	1	0	2
この授業に真剣に取り組んだ	13	17	0	0	2
この授業は楽しく受けることができた	7	17	5	1	2
この授業で英語力をつけた	12	17	1	0	2
この授業を後輩に勧めたい	13	14	3	0	2
授業の内容					
	強くそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない
授業の目標は妥当だった	9	21	0	0	2
The Independentの記事は自分のレベルに合っていた	3	16	9	2	2
The Independentの記事は興味深いものだった	11	17	2	0	2
課題の量は適切だった	6	20	3	1	2
訂正された英文のフィードバックは役立った	18	11	1	0	2
英語テストは妥当だった	9	18	2	1	2

教師の教え方					
	強く そう 思う	そう 思 う	どちら とも い え ない	そう 思 わ ない	ま っ た く そ う 思 わ ない
教師は十分に準備して教えた	18	12	0	0	2
教師は熱意をもって教えた	17	13	0	0	2
教師は学生に適切に対応した	17	13	0	0	2
教師の教え方はわかりやすかった	16	14	0	0	2
教師の声は聞き取りやすかった	17	13	0	0	2
<p>この授業を受けてよかったことを書いてください。 21件の回答があった。書かれた内容については、読解力が伸びたことに関するものがもっとも多く、9件あった。</p> <p>私はリーディングが一番弱みなので、語彙力や読解力が伸びたと思います。</p> <p>つぎに多かったものが、説明がわかりやすかったということに関するもので6件あった。</p> <p>ネイティブの先生より、しっかり課題が出されて解説もわかりやすく優しく教えてくれたので本当のためにになりました。去年は英文を読む授業が少なかったため、TOEICでも苦戦していたのですが少しは得意になった気がします。英語は嫌いなのですが読んで内容を理解したときの楽しさを知れたのでよかったです。</p> <p>多くのニュース記事を読むことで、知識と単語力がつき、長文を読むことに抵抗が無くなりました。先生は日本語で解説してくれるので理解しやすかったです。</p> <p>また、文法と語彙が伸びたというものがそれぞれ5件あった。</p> <p>文法的な使い方だったり、熟語だったり新しく学べたことが多かったです。 私が受ける授業の中で一番英語の力がついたと思える授業でした。</p> <p>1人だけが、英語の新聞を読むことに興味をもつようになったというコメントがあった。</p> <p>英語のニュースを読むことに意欲が湧いた</p> <p>この授業で改善してほしいことを書いてください。 16件の回答があった。課題が多い、ブレイクアウトセッションの時間が短い、カメラをオンにしたくない、の3つがそれぞれ3件ずつあった。また、特にないも3件あった。</p> <p>グループセッションでの時間が少し短い気がしました。 他の授業も課題だらけだったので毎週の課題がストレスに感じるがありました。 カメラをONにして顔を出さなければならなかったことが時々苦痛に思うことができました。</p>					

5 択の選択式アンケート項目について結果は、「あなたの授業への取り組み」に関しては、どの項目も32名中24名

(75%)以上の回答者は、「強くそう思う」または「そう思う」を選択している。学生は、授業をよく理解し、真剣に取り組み、楽しく授業を受け、英語力をつけ、後輩に勧めたいと考えていることがわかる。このような結果は、英語コミュニケーション専攻の上級専門演習科目が6単位と少ないことと関係していると考えられる。すなわち、2年次までは専攻演習科目である英語の授業が12単位、週6回あったのに対して、3年次では履修次第で週3回以下に半減する。そのため、学生は少なくなった英語の授業に積極的に取り組んだのではないかと推測される。

「授業の内容」については、1項目を除いて、32名中26名(81%)以上の回答者が「強くそう思う」または「そう思う」を選択している。学生は、授業の目標は妥当であり、新聞記事は興味深く、課題の量は適切で、課題のフィードバックは役立ち、2回のテストは妥当だったと考えていることがわかる。唯一、「強くそう思う」または「そう思う」の回答が8割をきった(59%)のは、「新聞記事は自分のレベルに合っていた」である。4割ほどの学生は*The Independent*の記事を難しいと感じていたことがわかる。授業の内容に関して、8割以上の学生が内容が妥当だと回答したことについては、新聞記事の選択がもっとも大きな要因であると考えられる。筆者は毎日この新聞の記事の見出しを読み、興味深いものを見つけた場合は、それを保存している。そのようにして集めた記事を教材としているので、読んだ学生はその内容に驚いたり、おもしろがったりするだろう。それが授業内容について肯定的な回答が多い理由と考えられる。

「教師の教え方」に関しては、すべての項目で32名中30名(94%)以上の回答者が「強くそう思う」または「そう思う」を選択している。学生は、教師は十分に準備し、熱意をもって、適切に、わかりやすく教えたと考えていることがわかる。2020年度はオンライン授業であったために、このような回答になったのは予想外であったが、オンラインであっても教師の意識は学生に伝わることがわかった。

選択式のすべての項目で「まったくそう思わない」を選択した回答者が2名いる。匿名式のアンケートのため、2名の回答者がすべての項目で同一かどうかは確認できないが、難しい新聞記事を読み、多くの課題をこなさなければならない授業を否定的にみていた学生がそのような回答をしたものと考えられる。対面式授業であれば、そのような学生は発見しやすく、学期中に対応できたと思うが、オンライン授業のため発見が難しかった。

「授業を受けてよかったこと」についての自由記述で、英語力全般、細かくは読解、語彙・文法が伸びたという回答が多かったことについては、英語の新聞を読み、それを要約して、自分の意見を英語で書くという活動によるところが大きいと考えられる。英語を読むという受容的的技能に加え、要約と意見を書くという産出的技能を必要とする活動に取り組ませることにより、学生は新しい語彙表現や文法項目を内在化したものと考えられる。

「教師の説明がわかりやすかった」という点については、筆者が日本語で授業を行ったためだと推察される。履修学

生は英語コミュニケーション専攻の3年生で、主として英語母語話者の教師による授業を受けてきた。当然、語彙・文法についての説明も英語である。そのため、英語による説明がわからなかった学生は、日本語による説明をわかりやすいと回答したものと思われる。

「授業で改善してほしいこと」についての自由記述で、課題の量とブレイクアウトセッションの時間についての回答について考察する。課題の量は、オンライン授業でどの授業も課題を出すため、学生は授業以外で学習する時間が増え、負担に感じていたものと考えられる。しかしながら、「『大学設置基準』では1単位の授業科目を45時間の学修時間を必要とする内容で構成することを標準とし…」(大学設置基準第六章第二一条)とあるように、演習科目では1単位につき、授業時間以外に毎週1時間の学修が必要である。したがって、本授業の課題が量として多いとは考えられない。

予習してきたワークシートの答え合わせを学生どうしできるようにブレイクアウトセッションを1つの記事につき、5分ずつとったが、それが短すぎるという回答があった。たしかにオンライン授業で全体ミーティングからブレイクアウトセッションに移動する時間やWi-Fiの接続状況がよくない学生を考えると5分間は短かったかもしれない。

4.2.2 2学期のアンケート結果

2学期のアンケートは、履修者40名中25名から回答があった。結果は、表3のとおりである。5択の選択式アンケート項目について結果は、「あなたの授業への取り組み」に関しては、どの項目も25名中22名(88%)以上の回答者は、「強くそう思う」または「そう思う」を選択している。この結果は1学期と同等のものであり、その理由も同様のものと考えられる。

表3 2学期のアンケート結果 (25件の回答)

あなたの授業への取り組み					
	強くそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない
この授業はよく理解できた	14	10	0	0	0
この授業に真剣に取り組んだ	15	8	0	0	0
この授業は楽しく受けることができた	11	11	1	0	0
この授業で英語力をつけた	14	9	0	0	0
この授業を後輩に勧めたい	14	8	1	0	0
授業の内容					
	強くそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない
授業の目標は妥当だった	13	10	1	0	0
The Independentの記事は自分のレベルに合っていた	7	15	1	0	0

The Independentの記事は興味深いものだった	14	8	1	0	0
課題の量は適切だった	15	7	1	0	0
訂正された英文のフィードバックは役立った	16	6	1	0	0
英語テストは妥当だった	17	5	1	0	0
面白いと思った記事にチェックをつけてください。 難しいと思った記事にチェックをつけてください。				面白い	難しい
1A: Pigs start 75 square metre fire after swallowing ...		5			3
1B: Kitten born with two faces dies days after internet fame		11			2
2A: Food prices to go up from 1 January unless UK reaches EU ...		6			6
2B: William Shakespeare was undeniably bisexual, researchers ...		7			5
3A: Boy, five, stopped by police on his way to pick up Lamborghini		15			4
3B: 'She went up so high, it was higher than my house'		4			2
4A: SpaceX to send four members of the public to space		5			10
4B: Scientists discover planet where it rains iron		5			11
5A: Burger King unveils mouldy whopper in bizarre new ad		17			2
5B: Climate crisis: Cod could disappear from British menus		5			8
6A: Three dead after dry ice thrown into swimming pool		11			2
6B: A quarter of Brits make social plans with no intention		6			5
7A: Microplastics now being found in human organs		5			8
7B: California bill aims to legalise human composting		4			7
8A: Brain surgery patient filmed playing violin during operation		14			5
8B: Language will be obsolete in as little as five years		9			10
9A: Female domestic abuse survivors '44 per cent more likely'		11			3
9B: How robots are increasing the gender pay gap		5			11
10A: Climate crisis: Mysterious pink snow in Alps sparks fears		6			7
10B: Climate crisis: Tropical rainforest 'tipping point'		5			13
11: McDonald's 80th anniversary		17			15
読んだ記事について英語または日本語で誰かに伝えたことがありますか。				英語	日本語
10回以上ある		0			1
5～9回ある		0			3
3～4回ある		4			8

1～2回ある	9	10
ない	10	2

この授業を受けてよかったことを書いてください。
18件の回答があった。書かれた内容については、読解力が伸びたことに関するものももっとも多く、6件あった。

英語の記事を通してリーディング力が身についたとともに、記事の内容がおもしろかったので楽しく授業を受けることができました。

TOEICのリーディングのスコアがかなり上がりました。RW A、B履修前は485点だったのですが、615点まで点数が上がりました！

つぎに多かったものは、語彙力の伸びに関するもので、5件あった。

文章の中で分からない単語などがあった時に調べて意味を理解できたので単語力がついたことはよかったです。

単語力がとても身につきました。

また、海外のニュースについて知ることができてよかったという回答も4件あった。

海外のリアルな記事を読むことができたので、新しい単語の知識や世界情勢、歴史などを理解することができました。友人や家族などにもその情報をネタにコミュニケーションを取ることができました！

実際に、海外で読まれている記事なので、英語の文章はもちろん、リアルタイムで時事を知れて良かった。

英語力が伸びたという回答も3件あった。

自分の英語力、長い記事を簡潔にまとめる能力がついたと思う。

英語能力が伸びた気がする。

この授業で改善してほしいことを書いてください。

11件の回答があった。内容としては、特になしが多かったが、多く6件で、ブレイクアウトセッションの時間を伸ばしてほしいが2件、あとは1件ずつであった。

ワークシートの答え合わせの時間がもう少しあればよかったなと思います。

内容が難しいからかテストが難しすぎる。テスト勉強は結構した方だが、テストでは良い点を取れなかった。

「授業の内容」については、すべての項目で25名中22名(88%)以上の回答者が「強くそう思う」または「そう思う」を選択している。これは1項目を除いて1学期と同等のものである。その理由も1学期と同様のものと考えられる。唯一の違いは、1学期は4割ほどの学生は*The Independent*の記事を難しいと感じていたことに対して、2学期は難しいと回答した学生は1名(5%)で、88%の学生は「記事が自分のレベルにあっていて」と回答している。この理由については、2つ考えられる。1つは、履修条件による履修学生の能力の違いに由来すると思われる。1学期は履修条件がなく、このクラスに割り当てられた全員が履修可能であったのに対して、2学期は、TOEICのスコアが550ポイント以上の学生しか履修できなかった。したがって、2学期の履修学生は1学期の履修生よりも英語力が平均して高かったために、*The Independent*の記事は自分のレベルに合っていたと回答したと推察される。第2の理由は、アンケート回答者数の違いである。1学期は履修者26名なのに32

の回答があった。逆に2学期は履修者は40名であるのに、25の回答しかなかった。すなわち、2学期は、もともと英語力が高い学生が多くアンケートに回答し、英語力がそれほどでもない学生はアンケートに回答しなかったためにこのような結果になったのかもしれない。このことは、他の項目の回答にも影響していると考えられる。1学期は選択式のすべての項目で「まったくそう思わない」を選択した回答者が2名いたが、2学期はすべての項目で「そう思わない」「まったくそう思わない」と回答した学生はいなかった。

2学期は*The Independent*の記事の中で「おもしろかったもの」と「難しかったもの」を複数回答可で回答してもらった。その結果、それぞれのベスト3は表4のとおりである。

表4 おもしろかった記事と難しかった記事ベスト3

おもしろかった記事	面白い	難しい
5A: Burger King unveils mouldy whopper in bizarre new ad	7	2
11: McDonald's 80th anniversary	17	15
3A: Boy, five, stopped by police on his way to pick up Lamborghini	15	4
難しかった記事	面白い	難しい
11: McDonald's 80th anniversary	17	15
10B: Climate crisis: Tropical rainforest 'tipping point'	5	13
9B: How robots are increasing the gender pay gap	5	11

表4から、8割近くの学生は身近なバーガーキングやマクドナルドの記事、7割近くの学生は「5才の男の子がランボルギーニを買うために5ドルを持ってユタ州からカリフォルニアに車で向う途中、警官に車を止められた」記事をおもしろいと回答していることがわかる。逆に、「マクドナルドが屋台の店からどのようにして世界的ファーストフードチェーンに発展したか」「熱帯雨林の木が気温32度以上になると枯れて二酸化炭素を放出して温暖化が進む」「ロボットによる自動化が男女の賃金格差を拡大している」という記事は、多くの学生にとって難しいものだったことがわかる。同時に、おもしろいと回答した記事は、難しいという回答が低く、逆に難しいと回答した記事はおもしろいという回答が低いことがわかる。これは、記事が難しく内容を理解できなければ、おもしろいとは判断できないことを示している。教師がおもしろいと思う記事であっても、文章のレベルが学生に合っていなければ学生はおもしろいと思わないわけである。記事の選定にあたり、学生のレベルを考慮することの重要性に留意すべきであろう。

これに対する例外は、マクドナルドの80周年記念の記事である。これは22名中15名が難しかったと回答しているが、17名がおもしろかったとも回答している。これは学生にとって身近であるマクドナルドがどのように発展してきたかについてのもので、多少難しくてもその内容を知りたいと思ったのではないだろうか。そう考えると記事の選定には、文章の難易度レベルも重要だが、それ以上に学生が興味関心を示す記事を優先すべきだともいえる。

2学期はさらに「読んだ記事について英語で誰かに伝えたことがありますか。」「読んだ記事について日本語で誰かに伝えたことがありますか。」という質問項目を追加し、「10回以上ある」「5～9回ある」「3～4回ある」「1～2回ある」「ない」の5択で回答してもらった。「英語で伝えた」は23件の回答があった。「3～4回ある」が4名、「1～2回ある」が9名で、「ない」が10名である。「日本語で伝えた」は24件の回答があった。「10回以上ある」が1名、「5～9回ある」が3名で、「3～4回ある」が8名、「1～2回ある」が10名で、「ない」が2名である。

英語で伝えた回数が少ないのは、コロナ禍でオンライン中心の授業で、英語を話す教師や他の学生と授業以外で会う機会がほとんどなかったことが大きく影響しているように思える。英語を話すことに意欲的な学生はオンラインiLoungeで、おもしろいと思った記事について話したかもしれない。「英語で話したことが3～4回ある」と回答した4名はこのような学生だったと推測される。それに対して、日本語で伝えたという回数が多いのは、家族や友だちという日本語で話す相手がいるからだと考えられる。家族や友だちならば、対面での会話であれ、電話での会話であれ、話題のひとつとして、英語の新聞で読んでおもしろかった記事について話すことは十分に考えられる。そのため、英語で伝えたに比べて、日本語の回数が多いのはもっともなことである。

「授業を受けてよかったこと」についての自由記述で、英語力全般、読解、語彙が伸びたという回答が多かったことについては、1学期と同じである。1学期と異なる点は、「海外のニュースについて知ることができてよかった」という回答が4件あったと、「文法力が伸びた」「教師の説明がわかりやすかった」という回答が2学期では見られなかったことである。この違いは、選択式の回答の違いと同様に、履修者の英語力の違いによるものと考えられる。2学期の履修学生は全員TOEIC550ポイント以上を取得していて、基本文法は習得していて、文法的な説明はあまり必要でなかったのかもしれない。逆に、英語力が伸びたことで*The Independent*の記事をよりよく理解することができ、海外の出来事を知ることができてよかったと思う学生が増えたのかもしれない。

「教師の説明がわかりやすかった」という回答が2学期では見られなかったことについては別の理由も考えられる。それはワークシートの内容理解確認方法の違いである。1学期は、英語の質問に英語で解答する形式であったのに対して、2学期は日本語訳や日本語での質問で内容理解を確認した。1学期は英語の質問に対する解答を間違えた学生が、日本語の説明を聞いてよくわかったと感じたのかもしれない。それに対して、2学期は始めから日本語で解答を求めたので、説明がそれほど必要でなかったのかもしれない。

「授業で改善してほしいこと」についての自由記述で、ブレイクアウトセッションの時間については、1学期と同じであった。学生どうしで確認する時間をもっと増やすべきだった。また1名だけであるが、学習方法について助言

がほしかったという回答があった。授業に対処するための方法について十分指示できていなかったことがわかるコメントである。今後の授業に活かしていきたい。

5. 結論

本稿は、筆者が2020年度に新しく担当したReading Workshop A/Bという科目の学習目標設定、教材、指導方法の妥当性について、試験とアンケート結果から考察したものである。最初に掲げた5つの学習到達目標はつぎの5つであった。

- (1) イギリス国内の出来事だけでなく、世界で報道されるニュースを読み解く力を育成する。
- (2) ニュースの背景やその後の進展について考える。
- (3) ニュース記事の内容を英語で要約し、口頭で伝えることができる。
- (4) ニュース記事の内容について自分の意見を英語で表現することができる。
- (5) 英字新聞で頻繁に使われる語彙表現を習得する。

このうち、(1)については平均点が70%以上という試験結果から達成できたのではないかと考える。(5)については1学期・2学期どちらのアンケートの自由記述に語彙力がついてという回答が数件みられたことから、これもある程度達成できたと考えられる。(2)(3)(4)が達成できたことを示す証拠は今回は提示できなかった。今後は、これらの学習到達目標が達成したことを示すデータを提示する必要がある。

教材としての新聞記事の選択、ワークシートの作成、授業での指導方法については、アンケート結果からおおむね妥当なものであったと判断することができる。今後もこのような教材の選択と指導を心がけるのが望ましいだろう。

本実践報告の限界は2つある。1つは、学習到達目標の達成ぐあいの判断が客観的なデータに基づいていない点である。アンケートでは英語力がついた、読解力がついた、語彙が増えたと学生が主観的に述べているが、実際にそうであることを示す証拠はない。学習到達目標が達成されたかどうかは、客観的な証拠を示す必要があるだろう。2点目は、アンケートの回答者が多すぎたり、少なかったりと統一されていなかったことである。今後はきちんと全員から率直な回答を引き出せるような方法を採用する必要がある。

参考文献

- 文部科学省 (2017) 「高等学校学習指導要領」
 文部科学省・国立教育政策研究所 (2019) 「OECD 生徒の学習到達度調査2018年調査 (PISA2018) のポイント」
https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01_point.pdf
 文部省 (1956) 「大学設置基準」

資料

資料1 : Reading Workshop A用The Independent記事抜粋

1A: Dog 'drives' car in reverse for an hour after being left alone

1B: Dog starts house fire by turning on microwave

2A: Cancer patient burned alive during operation

2B: Woman dies in cake-eating contest in Australia

3A: Physical exercise during academic lessons can help boost test scores, study suggests

3B: Four in five teenagers not doing enough exercise, says World Health Organisation

資料2 : Reading Workshop B用The Independent記事抜粋

1A: Pigs start 75 square metre fire after swallowing and excreting battery powered pedometer

1B: Kitten born with two faces dies days after internet fame

2A: Food prices to go up from 1 January unless UK reaches EU trade deal, retailers warn

2B: William Shakespeare was undeniably bisexual, researchers claim

3A: Boy, five, stopped by police on his way to pick up Lamborghini

3B: 'She went up so high, it was higher than my house'

資料3 : Reading Workshop A用ワークシート抜粋

1A: Dog 'drives' car in reverse for an hour after left alone

1. What did the dog do?
2. Who do you think called the police? Why?
3. Do you think the dog kept pressing the accelerator? Why or why not?

1B: Dog starts house fire by turning on microwave

1. What burned in the house?
2. Why do you think the dog inadvertently turned the microwave on?
3. How do you think the firefighters got into the house?

Write a summary of one of the articles and express your opinion on it.

資料4 : Reading Workshop B用ワークシート抜粋

1A: Pigs start 75 square metre fire after swallowing and excreting battery pedometer

I. 次の日本語に相当する英語を本文中から抜き出しなさい。

1. 排出する ()
2. 歩数計 ()
3. 炎 火事 ()

II. 次の質問に答えなさい。

1. 火事はなぜ起こったのか。
()
2. 歩数計をつけたのはなぜか。
()

1B: Kitten born with two faces dies days after internet fame

I. 次の日本語に相当する英語を本文中から抜き出しなさい。

1. とらえる 捕まえる ()
2. 熱愛の 熱狂的な ()
3. 捧げられた ()

II. 次の質問に答えなさい。

1. I wish I hadn't said that we wishes he was eating more. と言ったのはなぜか。
()
2. BiscuitsのようなネコがJanusとして知られているのはなぜか。
()

III. Go to the i-Lounge. Which article would you like to talk about there? Why?

資料5 : 復習単語テスト抜粋

A 次の文の () に入れるのにふさわしい語を下から選び、書きなさい。
/ damage / firefighters / incident / packet / passenger / property / replace / reverse / smoke / store / witness /

1. Neighbours found a car moving in () around their circular block.
2. Police stopped the car and found there was a () that was a dog.
3. The dog was not injured but caused some minor damage to the neighbours' ().
4. The dog's owner promised to () the mailbox.
5. A () said that the dog looked happy with its experience.

資料6 : 試験抜粋

次の文章の空欄に選択肢からもっとも適切な語を選び、書き入れなさい。

/ celebrate / detach / diversify / maintain / redefine / represent /

Barbie manufacturer Mattel has announced that it will release a new line of dolls throughout 2020. Its creators say it will showcase "a multi-dimensional view of beauty" and "(1) global diversity and inclusivity". Mattel said that it aims to "(2) what it means to be a Barbie or look like Barbie" with the launch of its new doll with vitiligo, adding

that it will allow children to “play out even more stories they see in the world around them”. The new additions will further (3) Barbie’s Fashionista range, a conscious move by Mattel to (4) itself from the sexist stereotypes and unrealistic beauty expectations once associated with the doll. Kim Culmone, senior vice president of Mattel’s doll design, said the toys are a “reflection of culture” and that as the world continues to (5) the positive impact of inclusivity, Mattel felt “it was time to create a doll line free of labels”.